

学年での動物飼育体験が 子どもの動物への共感性および向社会的行動の 発達に与える影響の検討

中島 由佳 (お茶の水女子大学 大学院 人間文化研究科)
中川美穂子 (全国学校飼育動物獣医師連絡協議会主宰
お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター研究協力員)

吉本恒幸 (西東京市向台小学校校長)

池田日佐子 (台東区立富士小学校校長)

小林道正 (東京学芸大附属小金井小学校副校長)

無藤 隆 (白梅学園大学学長／お茶の水女子大学教授)

07年1月14日全国学校飼育動物研究大会 御茶ノ水女子大学

1

学校での動物飼育は、本当に有意義な効果を持つのか

これまでに、学校、学年、クラスでの動物飼育による
子どもの心の育みの事例が報告されてきた

しかし・・・

学校・学年で動物飼育をしない場合に比べて、
本当に効果があるのか



客観的、実証的な検証の必要性

2

調査

目的:

動物の学年飼育が小学生の動物への共感性、
向社会的行動の発達に与える影響の検討

小学4年生時に、学年での動物飼育を行う学校と
行わない学校で、1年間の縦断調査



学年飼育を行った小学4年生と行わなかった小学4年生の
動物への共感性および向社会的行動の変化を比較する。

3

調査対象者

学年飼育あり群

学年での動物飼育(ウサギ、チャボのどちらか、あるいは両方)を
行っている西東京市、小平市の小学校7校の4年生467名
(女子233名, 男子234名)

学年飼育なし群

学年飼育を行っていない西東京市、小平市の小学校5校の
4年生328名(女子188名, 男子140名)

このうち、

家庭での動物飼育経験のある者 330名
(学年飼育あり群 206名, なし群 124名)

家庭飼育経験のない者 465名
(学年飼育あり群 261名, なし群 204名)

4

調査時期

Time 1: 学年飼育開始前(平成17年 3月)

Time 2: 学年飼育開始1年後(平成18年 3月)

調査内容

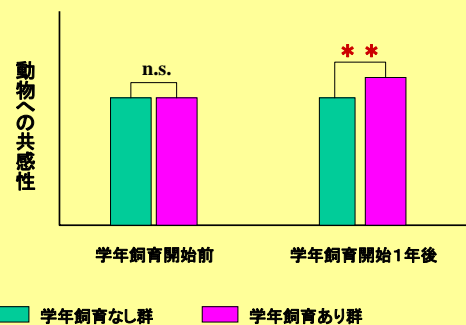
動物への共感性: Ascione(1999)から

- ・ 走っている馬が倒れたら悲しく感じるだろう
- ・ 犬は、夏に窓の閉まった暑い車の中にいるのはいやだろう
- ・ 動物たちを守るためには、法律が必要だ など8項目

向社会的態度: 菊池(1988)から

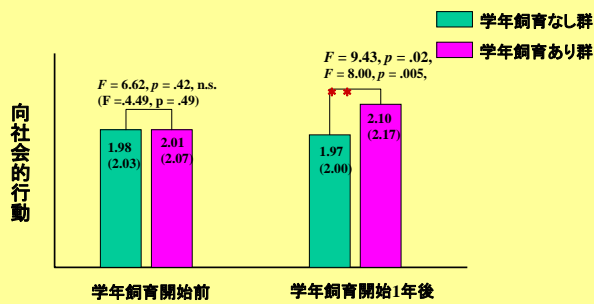
- ・ バスや電車で、お年寄りや怪我をした人に席をゆずる
- ・ 気持ちの落ち込んだ友だちに電話したり、手紙を出したりする
- ・ 列に並んでいても、急ぐ人がいたら順番を譲ってあげる など10項目

結果1: 動物への共感性の群間の差



6

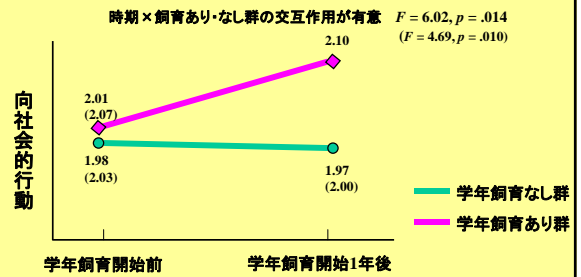
結果2-1 向社会的行動（群間の差）



家庭での動物飼育経験なしの生徒に特に顕著！

7

結果2-2 向社会的行動（群ごとの変化）



家庭での動物飼育経験なしの生徒に特に顕著！

8

考察

1. 学年での動物飼育で育まれるもの

動物への共感性

向社会的行動

- ・ バスや電車で、お年寄りや怪我をした人に席をゆずる
- ・ 友だちの宿題や練習を手伝ってあげる

||

他者を思いやる心、行動の育み

9

2. 学年飼育の意義

学年動物飼育1年後での向社会的行動の高まり

家庭での動物飼育経験のなかった生徒に特に顕著



たとえ家庭で動物を飼育できる環境になくとも

- ・ 学年で動物に親しみ、
- ・ 教員の指導の下 責任を持って飼育をする

対人面において 肯定的な発達の影響

10

まとめ

現在、学校での動物飼育は減少傾向に見られるが、
子どもの精神的な発達を促す動物飼育の効果に留意すべき

本調査結果を生み出した要因

- ・ 教員が、獣医師とも連携して指導
- ・ 子どもたちが飼育に責任を持って参加



他者の生命の尊重、思いやりを修得

動物の学校での飼育は、子どもの情緒教育に重要

11

ご清聴 ありがとうございました。

12